

郡上凌霜隊を偲ぶ

今まさに内憂外患である。諸外国の圧力と国内経済の行詰まりはおよそ180年前も似たような時代であったろう。そういった中で先人たちは仕組みの在り方において、大きく舵を切って生き延びてきた。その過程にあつては文字通り、身を切り血を流したのである。その一例はわが町、郡上市でも見ることができる。

郡上凌霜隊

勤王か佐幕か

当時郡上藩は譜代青山氏が治める、四万八千石の山間小藩であった。慶応4年新年に始まった戊辰戦争で薩長軍が勝利し、幕府軍は朝敵となった郡上藩においては、比較的京都に近い国元郡上では新政府派、江戸では幕府派といった当時としては常識的な藩論であった。が国許では新政府の命で天領和良郷、飛騨国の取り調べ、東征軍の付き添いのため藩兵派遣等をおこなった。

凌霜隊の結成

一方江戸においては、小藩の生き残りの道を探る中で、藩の内意のもと45名の脱藩、一党の結成がなされた。これが郡上凌霜隊である。多くの親藩がそうであったように、いわゆる二股掛けを行ったのである。この時期同様な佐幕部隊は、草風隊(伊予松山藩・水戸藩の脱走者)・貫義隊、七連隊(いずれも旗本などの脱走者)などがあり、凌霜隊と行動をともにすることになる。凌霜隊は佐幕派の中心である会津藩兵と共に転戦するが、その過程で多くの犠牲を払うことになった。

凌霜隊の末路

新政府軍に追い詰められた幕府軍は若松城で籠城した。一般的に籠城では食料不足が最大の敵ですが、会津藩は十分な備えをしており5千人の男女は飢えることは無かったが、糞尿の処理が出来ず、城中足の踏み場も無いという思わぬ落とし穴があったそうです。そんな中、凌霜隊はかの有名な白虎隊とともに城の一角で守備ついた。守備についたとはいえ当時はもう弓槍刀での戦闘は皆無に近く砲撃戦が主体であった。昼夜の別無く打ち込まれる砲弾から逃げ惑うばかりの戦闘であり、わずか20日足らずで会津藩主は降伏したのです。

郡上藩の処遇

猪苗代で武装解除された隊員は脱走兵として扱われ、旧藩へ預けられることになり江戸経由船でいまの三重県の矢浦へ到着した。その後宇治山田、明星、松阪、津、四日市、桑名にいたり、郡上からの護衛隊と合流し大垣、加納、芥見などを通って八幡へ入りました。ところが帰藩後即日牢屋入りを命じられて罪人扱いとなり、風通しの悪い牢屋で粗末な食事をあてがわれ、病人が続出した。見かねた寺院の僧侶達が「本来忠義の士である。ひどい処遇は藩の恥じである。」と嘆願しこれが聞き入れられて、長敬寺と言う寺に預けられました。ようやく1年後に自宅謹慎となり、さらに半年後に謹慎が解かれた。10名の死者行方不明者出し、生き残ったものは天皇に逆らった者との汚名と投獄、謹慎を受けた凌霜隊に対し世間は決して暖かく迎えませんでした。このしこりは昭和の時代まで続いたそうです。山間小藩であったにもかかわらず、譜代藩であったがために必死に存続の道を求めた末に犠牲になった人たちでした。

世の移り変わり

この時代、勤王か佐幕かと言っても大多数の人々は将来の世を明確に語ることはできなかったであろう。そんな中、世界にお手本があつたとはいえ見事近代化へ舵を切った先人たちの

適応能力は驚嘆に値する。
現代へ目を向ければ、全世界ほぼ資本主義経済に凌駕されているが、果たしてこの状態が
未来永劫続くのであろうか。
わが国においては、国民皆医療保険・年金・生活保護の拡大・国民に平等なバラ撒き
等々の延長線には、どんな経済構造が、どんな社会が待ち受けるのだろうか。